1949年９月17日第三種郵便物認可　毎月10日発行　第718号（通巻1222号）　定価１部40円

創立1880年
東京YMCA
2014 9 月号
発行所　公益財団法人東京ＹＭＣＡ　発行人　廣田光司
135-0016　東京都江東区東陽2-2-20　電話　03-3615-5562
URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京ＹＭＣＡの使命
東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

バスケットボール100周年

＜発祥の地＞　スプリングフィールド大学

クーパー学長来訪

日本で初めてバスケットボールの公式試合が行われてから今年で100周年を迎えることを記念して、日本バスケットボール協会は、その発祥地である米国スプリングフィールド大学のバスケットボールチームを招待。7月17日から6日間にわたり関西で親善試合を行いました。また京都ＹＭＣＡには記念碑が設置され、京都市長等も訪れる中で除幕式が行われました。その後7月23日には東京ＹＭＣＡで、学長メアリー・ベス・クーパー氏による講演会が開催されました（写真）。

クーパー学長（写真左）と東京YMCA総主事・廣田光司氏

スプリングフィールド大学は、ＹＭＣＡの指導者養成校として1885年、マサチューセッツ州に設立され、1891年にバスケットボールを考案したことで世界に知られています。「ＹＭＣＡの赤三角」（精神・知性・身体）の概念もまた、この大学で誕生しました。

バスケットボールはその後1909年に、同大学に留学していた東京ＹＭＣＡ主事の大森兵蔵が日本に紹介し、1915年に京都で初の国際試合が開催されました。

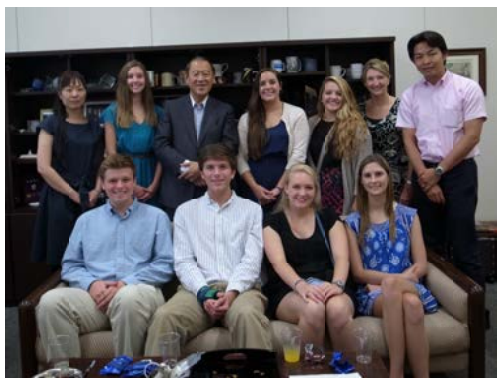
東京ＹＭＣＡはその後も同大学に学生や主事を派遣するなど友好関係にあり、特に社会体育・保育専門学校は、この大学を参考にして設立した経緯もあります。

現在同学は、教育や体育などの学部を中心に約5,000人が学んでおり、ＹＭＣＡに限らず多方面に人材を輩出しています。昨夏に第13代学長に就任したクーパー氏は、ロチェスター工科大学で学事部長を務めたキャリアをもち、またロチェスターＹＭＣＡにも20年以上かかわり、現在はその理事を務めています。

講演会でクーパー学長は、同大学の歴史や自身の経験をふまえ、今後は世界各地のＹＭＣＡとの連携をより深めていきたいとの展望を語られました。会場となった東陽町センターには、歴代の関係主事や近隣ＹＭＣＡの総主事・役員などが集い、これからの人材養成などについて意見交換が行われました。

（↑写真上）石巻の夏祭りで模擬店を出し、「石巻サンデー」を販売した。ワークキャンプ以来交流のある「野田や」さんが場所を提供くださり、地元の高校生や英語教師などでにぎわった。

「テイラー先生」の遺志継いで
米国高校生　石巻で交流


↑藤崎一郎元駐米日本大使と面会（東京・上智大学内で）

宮城県石巻市の英語教師テイラー・アンダーソンさん（当時24歳）は、東日本大震災で津波の犠牲となり、保護者に引き渡した後、自宅アパートに戻ろうとして亡くなりました。震災当日は市内の万石浦小学校で授業をし、校庭に避難した児童を励ました。震災当日は市内の学校の図書室に「テイラー文庫」と名付けられた英語絵本のコーナーが作られたり、ドキュメンタリー映画が公開されるなど、大きな影響を与えました。

テイラーさんが亡くなられたことについては、国内外で報道され、その後石巻市内の学校の図書室に「テイラー文庫」と名付けられた英語絵本のコーナーが作られたり、ドキュメンタリー映画が公開されるなど、大きな影響を与えました。

テイラーさんが幼い頃よりリッチモンドＹＭＣＡ（米国バージニア州）のメンバーであったこと、またお父様のアンディーさんがリッチモンドＹＭＣＡの役員をつとめていたことから、東京ＹＭＣＡとリッチモンドＹＭＣＡ、そしてテイラーさんのご家族が設立なる交流プログラムではテイラーさんの母校の後輩を中心に青年7名を石巻に招待しました。東京での藤崎一郎元駐米日本大使との面会、米国大使館訪問の他、都内観光として浅草や原宿をまわりました。都内観光には東京ＹＭＣＡの語学クラス卒業生や国際プログラムのリーダーが同行ボランティアとしてお手伝いしてくれました。その後、石巻へ移動し、被災地視察、ホームステイ、仮設住宅訪問等のプログラムを行い、石巻最大のお祭りである川開き祭りではアメリカから持ち寄ったトッピングを使って「石巻サンデー」と名付けたアイスクリームを販売しました。ホームステイをはじめとする現地活動は2年前にリッチモンドに派遣された石巻の子どもたちが受け入れをしてくれました。

参加者の一人は、「テイラーさんのすばらしい人間性が教え子に伝わっているのを強く感じ、彼女とつながっていることを誇りに思う」と話しました。日本を愛し、日米の懸け橋になろうとしたテイラーさんの遺志を継いで、今後も青少年育成を目的とした交流プログラムを続けていきたいと考えています。

（会員部　村上祐介）

（＝2面に関連記事）

種のドラマ

子育てコラム

東京ＹＭＣＡの幼稚園、保育園、こども園、児童館には、現在１０００人余りの在籍者があります。１０００の命は１０００通りの事情と個性にあふれています。保育に携わる者の使命は、この１０００の、命あふれる〝種〟が豊かに成長する環境を整え、見守ることです。見守りの在り方は１０００種類です。

芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ（あいぷら）には、学童クラブだけで１３２の個性的な命が躍動しています。個性のぶつかり合いは、様々なドラマを生み出しています。キャストの個性も様々です。内気な子、強気な子、元気な子…。このドラマを見守る保育者も、気が付けば悲喜劇の「コリントの信徒への手紙」13章6節）。種を植える者があり、水を与える者があり、それぞれに大切な役割を担っているが、種に命を与え、成長させてくださるのは神さまだ、ということです。

神さまが一つ一つの〝種〟に与えられたかけがえのない命、個性、能力が生き生きと発揮されるよう、今日も保育者は奮闘しながら、その成長を見守っています。

……

鶴　清忠
（港区立芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ館長）

赤▽三角

ホウセンカという花をご存じであろう。草丈は20～60センチ程で夏頃に赤い花を咲かせる。実は熟すと果皮の力で弾けて、種を遠くに飛ばす。病虫害にも強く、こぼれ種でもよく育つとても丈夫な植物である▼私は16年程前、東京ＹＭＣＡから現職のキリスト教高校の教員へと転職した。外に出てみるとＹＭＣＡの働きが客観的に見えてくるものだ。思いもかけないところでＹＭＣＡを見つけ、驚きながらもうれしく思ったりする。通勤電車内の「高尾の森わくわくビレッジ」の広告に「赤三角」を見つけたときは思わず声が出そうになった。最近うれしかったのは教会の幼稚園教諭の新人がＹＭＣＡのリーダー経験者だったこと。ＹＭＣＡの経験が保育者の資質を高めていることを感じ、たくましく思った▼また逆にＹＭＣＡから私にお声がかかったこともある。たとえばハイスクールＹＭＣＡの集会に現顧問として発題を依頼されたり、勤務先が東京ＹＭＣＡ高等学院のスクーリング会場校となるなど、微力ながらもお手伝いすることができた▼ＹＭＣＡの活動は中心の活動と共に、その周りからも小さな芽が育つことがある。それらの一つ一つを大事にし結びつけることで様々な可能性が広がっていくのだと思う。そんなネットワークの強化が、今あらためて求められているのではないだろうか。

（高等学校教員／元ＹＭＣＡ職員　石川　理）

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

４回目の夏も　被災地と共に

＝１面より

今夏も東京ＹＭＣＡは、石巻小学校でのプール指導、学習支援、レクリエーション活動、仮設住宅でのお手伝い、カキの養殖作業など、連日プログラムを行いました。また福島支援のためのリフレッシュキャンプも、企業の協賛を得て3回実施。約120人の親子を招待しました。

被災地の障がい児に笑顔を

石巻でデイキャンプ

社会体育・保育専門学校
障害者スポーツゼミ学生

東京ＹＭＣＡ社会体育・保育専門学校「障害者スポーツゼミナール」の学生12人が、8月5日～6日、石巻市の公民館「遊楽館」で、障害児を対象としたレクリエーションプログラム「２０１４石巻ニコニコデイキャンプ」を実施。石巻近郊から9人の小中学生とその保護者が参加し、ミニ運動会やアイスクリーム作り、工作などの活動を行いました。

この「障害者スポーツゼミ」は、社会体育専門課程2年生を対象とした選択科目で、障害者のスポーツや余暇活動について学んでいます。指導は及川栄子先生。年に数回、障害者のスポーツ大会や養護学校のキャンプ、行政のイベントなど、ＹＭＣＡ内外でのボランティア活動を行い、理論と実践の両面から学んでいきます。

今回の活動は、4月に学生が提案したことから始まり、活動の詳細も学生自身で企画していきました。

参加した保護者は「震災後3年も経つが、家の復旧等毎日が忙しく、どこにも連れて行ってあげられなかった。今年の夏休みは楽しい思い出を作ることができました」と語られました。学生の感想を紹介します。

石巻の親子と学生たち。後ろの絵は子どもたちのフィンガーペイントによる共同作品。

子どもの笑顔に励まされて

吉成　彩紀

4月のゼミナールで「石巻でやってみたいね～」という、夢のような話をしたことから、どんどん準備が始まり、話も進んでいきましたが、正直なところ本番を迎えるのが不安で仕方がありませんでした。しかし、いざ本番を迎え子どもたちの笑顔をみたら不安なんて吹き飛びました。子どもたちの笑顔が私の頑張る源になりました。障害をもっていてもやってみたいことやできることはたくさんあって、素敵な子どもたちでした。この活動を通して「素直になる気持ち」「愛情」「笑顔」を教わりました。今回のような活動をもっともっと増やし、もっともっと子どもたちの笑顔を引き出してあげたいと、心の底から思いました。

被災地見学もしましたが、震災から3年たった今でも復旧が遅れているところなど、私たち関東に住んでいる者には考えられない世界がありました。このことをしっかり胸に刻み、今のこの当たりまえのように過ごしている日々を大切にしたいと思いました。

被災地の大変さ忘れない

宮里　志鶴

「被災地にいる障害のある子どもたちに、心から楽しいと思える時間を過ごしてほしい」という想いから企画が始まりました。メディアで取り上げられることが少ない被災地の障害をもつ子どもたちはどんな生活をしているのか、疑問に思ったことがきっかけでした。

被災地に下見に行ったり、保護者の方からお話を聞いてみると、私たちが想像しているよりもずっと大変な思いをされてきたことがわかりました。大きな苦労を抱えているということを、私たちは忘れてはいけないと思いました。

実際のプログラムではボイントハイクやおやつ作り、ゲーム大会などを行いました。子どもたちの笑顔をたくさんみることができて本当に嬉しかったし、私たちもとても楽しかったです。あっという間の2日間、素敵な時間でした。

今回の企画を実現するにあたり、力を貸してくださった多くの方に感謝の気持ちでいっぱいです。また来年、再来年と続いていけるよう、次につなげていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

医療福祉専門学校
仮設住宅で草むしり

8月11日～14日、石巻でのボランティアに参加させていただいた。学生13人とともに、3年以上経った被災地に足を踏み入れることに誰もが不安と期待が入り交じった感情を持っていた。

主な活動は仮設住宅の草むしりだった。もちろん黙々と草むしりだけをやりにいったのではない。現地の方との交流の中で、報道では描かれない感情に触れることができた。

まだまだ多くの悲しみが覆っており、学生からは「何も力になれない」という感想も多く聞かれたが、一方で被災者からは「2～3年後には市営住宅に引っ越せる。そうすれば孫も泊りに来られる」など、はっきりとは言えないが「期待」とも思える感情も垣間見えた。確実にただ、少しずつ現地の方々の「1歩」が見えた4日間であった。

（作業療法学科教員　中浦俊一郎）

国際ホテル専門学校
10回目のワークキャンプ

7月16日～19日の3泊4日で、国際ホテル専門学校としては10回目のボランティアワークキャンプを実施。ホテル科2年生13人とスタッフ2人の総勢15人が、ＹＭＣＡ石巻支援センターに寝泊まりして作業にあたった。

今回は渡波地区の仮設住宅で、事前にお手伝いの必要なことはないか、ポスターを掲示するなどしてお尋ねしたところ、草むしり、換気扇やお風呂掃除、エアコン掃除など、多数のリクエストがあり、実施となった。

被災者との交流もまた、このワークキャンプの目的である。キャンプ後に、訪問先の方に励ましの手紙を送るなど、学生にとっても得難い経験になっている。

ワークの内容は変化してきているが、まだまだ継続の必要を感じている。次回は2月を予定している。

（国際ホテル専門学校　校長　小畑　貴裕）

ぶどうの枝

YMCAの人

評議員会 会長
勝田（かつた） 正佳（まさよし）さん（78歳）

ＹＭＣＡとの出会いは学生時代、野尻キャンプ場に行ったことから始まった。以後、海外勤務の合間に山中家族キャンプに参加したが、本格的なかかわりは定年後から。国際委員長や常議員をはじめ、学校法人東京ＹＭＣＡ学院の理事、評議員、日本ＹＭＣＡ同盟の主事退職金基金運用委員長など、数々の役職を務める。ＹＭＣＡ以外にも、国際基督教大学（ＩＣＵ）や日本基督教団、教団出版局などで、財界でのキャリアを活かして貢献している。

１９３６年、東京・馬込の生まれ。戦後、家庭事情の悪かった時代に、近くの牧師が図書館代わりに教会を使わせてくれた。その後21歳のときに洗礼を受けた。大学は、あえて奨学金制度のあるＩＣＵに入学し、卒業まで全額奨学金で勉強した。今、数々のボランティアをしているのは、その時の恩返しの気持ちからという。

山一証券に就職し、社の留学制度の1期生としてニューヨークで学んだ。以後、山一ロンドン・ヨーロッパ執行取締役や、英国クラインオート・ベンソン投資銀行の本社取締役、シンガポールの合弁投資銀行の副社長など、まさに財界人として世界で活躍された。

趣味もまた本格的である。単身でロンドンにいた時、毎週のように大英博物館に通い、自分でも庭の花などを描いた。出張などで訪れた国は50数カ国にのぼり、各地で美術館をめぐった。またスケッチも続け、今では日本スケッチ画会に所属。月に1回ほど水彩画を描く。今年の東京ＹＭＣＡ会員芸術祭には、レインボーブリッジと円覚寺の水彩画を出展した。ほかにメソポタミア文明の研究、ギリシャ語も学ぶ。「病も経験した」というが、そんな面影は感じられない。

（聞き手・文＝広報室）

＊コラム「ぶどうの枝」では、東京ＹＭＣＡに関わる人を紹介していきます。

東京ーＮＹ　フロストバレー便り

草の根の日米交流が育むもの

「ハロー。マイネーム　イズ・・・」少し緊張気味に会話が始まる。米メジャーリーグで活躍する日本人選手の話しになると、子どもたちの表情にも笑みがこぼれる。――この夏に行われた「ダイナミックサマープログラム」の、ホームステイの一コマである。「ダイナミック」は、日本の小中高校生が夏休みに北米ＹＭＣＡでキャンプやホームステイなどを体験するもので、人気がある。

子どもたちを快く受け入れてくれるホストファミリーは、ＹＭＣＡスタッフやプログラム参加者の家族、ボランティアリーダーの同窓生などだ。今年初めて参加してくれた家族もあれば、毎年この時期に孫と一緒にホームステイを受け入れるのを楽しみにしている老夫婦もいる。

初めて参加するホストファミリーには、事前に情報交換が行われる。あるスタッフは、毎年の体験談をおもしろおかしく話してくれた。「たくさん行事を詰め込みすぎないで、普段どおりの生活をすればいいのよ。子どもたちは言葉があまり通じなくてもあっという間に仲良くなるわ」。的確なアドバイスに皆一安心する。

「親も子も日本の文化が大好きだ」「娘におもてなしの心を伝えたかった」「充実した週末だった」。ホストファミリーからも嬉しいメッセージが届く。フロストバレーＹＭＣＡのスタッフも、「東京ーフロストバレーＹＭＣＡパートナーシップ」があるから、他ではできない経験ができると話してくれる。プログラムを通して相互理解がさらに深まっていると感じる。まさに草の根の国際交流である。

将来はスタッフの相互派遣をするなど、この交流をさまざまな形で発展させていきたい。そんなことも思うこの頃である。

（在フロストバレーＹＭＣＡ　星住秀一）

■　江東センター　３位入賞

全国ＹＭＣＡサッカー大会

「全国ＹＭＣＡサッカー大会」が8月20日から22日、静岡県御殿場市の時之栖（ときのすみか）で行われ、全国から約400人の小学生が参加しました。東京ＹＭＣＡからは江東センターの低学年・高学年各1チームが出場。高学年チームには、昨年の台風以来交流のある伊豆大島から3人の子どもたちが加わり、チームメイトとして活躍してくれました。

例年、奈良や横浜など、選手コースをもつＹＭＣＡが首位を独占する中で、今年は3位に入賞。子どもたちは大喜びでした。ＹＭＣＡのサッカーは、勝敗だけでなく、仲間と協力し相手チームも思いやるなど、フェアプレーの精神を大切にしており、大会の最後には「優秀選手」ではなく「フェアプレー賞」がおくられます。東京ＹＭＣＡからは、小学4年生の高橋颯君・5年生の大川広翔君が受賞しました。　（江東センター　大原真之介）

■　オール東京　夏まつり

恒例の「ＹＭＣＡ夏まつり」が8月30日、東陽町センターで開催されました。心配された雨も持ちこたえ、例年にない涼しい天候に恵まれて、今年も大勢の来場者でにぎわいました。焼きそば、チャーハン、炭火焼など、年々腕を挙げている模擬店が約20店。子ども向けには綿あめやスーパーボールすくい、吹き矢、バルーンアートなど7つのコーナーが作られ、浴衣を着た子どもたちの行列ができました。また、被災地物産店には、伊豆大島の物品も並び、また子どもたちが「石巻サンデー」（＝1面）を販売するなど、力が入りました。

今年は、開校したばかりの高等学院の生徒たちが、オープンスペースｌｉｂｙ（リビー）の生徒たちと一緒に出店（＝写真）。手作りのパウンドケーキや白玉フルーツポンチを販売しました。「ザ・ドリーム・スクエア・ジャズオーケストラ」のジャズ演奏が始まると、会員と一緒に思わず踊り出す生徒の姿も見られました。

今年の実行委員長は高嶋美知子さん。益金約50万円は、地域の会員活動ほかＹＭＣＡの行う公益活動のために用いられます。

■親子三世代でボランティア

グランチャ東雲　夏祭り

8月3日にグランチャ夏祭りを開催しました。今年はチャリティーということを前面に押し出しました。

グランチャ東雲が開設されたのは2011年。東日本大震災当時は開設準備の真っ最中でした。震災後の混乱で、備品の配送や破損箇所の修繕が間に合わなくなるのではないかとひやひやしましたが、なんとか4月のオープンにこぎつけました。そんな経緯から東日本大震災には、特別なつながりを感じています。これまでの夏祭りでも東北物産展や募金を行ってきましたが、今年は参加者にも募金や復興支援をアピールしました。

夏祭りも4年目を迎え、お手伝いをしてくださるボランティアの方々が増えました。これまでのシニアボランティアに加えて、お父さん、お母さん、子どもたちも参加。三世代のボランティアがそろったことは特筆すべきことです。特に小さな子どもたちの〝売り子ボランティア〟は楽しみながら物産品を売っていました。購入いただいた皆様もありがとうございました。

「ボランティア」は日本語にすると「奉仕」となり、自己犠牲的なイメージになりますが、私は「楽しむ」や「生き甲斐」といった言葉の方がふさわしいと思っています。グランチャが一人一人の楽しむ場所であったり、生き甲斐の場所になっていけたらいいなと思っています。

（グランチャ東雲　菅野牧夫）

■　改修した施設で　にぎやかな夏

東雲児童館

昨年度の改修工事によって建物がきれいに、使いやすくなった東雲児童館は、また多くの子どもたちや、親子でにぎわうようになりました。キャンプや月ごとに替わるクラフトなど、多彩なプログラムは人気があります。７月26日の「なつまつり」には約350人が来場。「射的」や「フェイスペイティング」など、たくさんのゲームや飲食コーナーを楽しみ、まさに熱気に包まれました。

夏に人気の「乳幼児 水あそび」では子どもを遊ばせながら職員や親御さん同士が語り合う姿が見られます。この何気ない会話が育児ストレスを解消するきっかけにもなっています。

東雲児童館では夏休みの午前中、図書室は宿題や読書をする人のために静かにするよう指導をしました。遊びだけでなく、子どもたちの規則正しい生活習慣を支えるのも、児童館の役割なのです。

（東雲児童館館長　佐藤　健）

■　伊豆大島の小学生をキャンプに招待

雨続き、でも友だちできたよ

昨秋の台風で被災した伊豆大島の子どもたちを励ましたいと、小学生8人を東京ＹＭＣＡの「白馬やまびこキャンプ」に招待しました。このキャンプは8月7日から9日まで2泊3日、長野県白馬村でハイキングや川遊び、野外料理などを体験するもので、都内近郊からも幼児・小学生31人が参加。しかし2日目の午後から雨となり、リフトを乗り継いで登る予定だったハイキングも途中で下山（＝写真）。川遊びも中止となり、旅館内の広間で歌やゲームをして過ごしました。結果として、グループを越えた交流の時間がたっぷりあり、リーダーや友達とのつながりが深まったようにも思いました。

大島の子どもたちは最初、初めてのキャンプに戸惑い気味でしたが、帰るころにはすっかり打ち解けて、リーダーや友達との別れを惜しみ、大島へのフェリー内でもキャンプソングを歌い続けていました。こうした体験が、子どもたちの成長の糧となり、辛いできごとも乗り越えていく力になればと願っています。

（江東センター　西嶋 健太）

■　初めての富士山プログラム

インターナショナルスクール

ＴＹＩＳ（東京ＹＭＣＡインターナショナルスクール）は7月8日～11日、「富士山プログラム」を実施、小学1～4年生の11名が参加しました。初日は教室で富士山の自然や安全について学習、2～3日目には全員で富士登山に挑戦し、山梨県側の吉田ルートから山頂を目指しました。

世界遺産登録の影響か外国人観光客が多く、英語が話せるＴＹＩＳの生徒たちは様々な国の人たちから「小さいのによく頑張るね」と声をかけられていました。残念ながら登頂には至らず8合目手前（およそ3,300m）で下山となりましたが、重い荷物を背負って岩道を歩ききった生徒たちは全員「来年は絶対に山頂まで登る！」と誓い帰路につきました。

プログラム最終日には、パワーポイントを用いて英語で発表、「雲に触れられるなんて知らなかった」「山で食べるごはんはいつもより美味しかった」などＴＹＩＳらしい感想があふれた報告会となりました。

（ＴＹＩＳ　依田あゆみ）

■　全国ＹＭＣＡ少年少女水泳大会

東陽町ウエルネスセンター健闘

今年第38回を迎えた「全国ＹＭＣＡ少年少女水泳大会」が8月21日から22日、千葉県国際総合水泳場で開催。全国から約200人の選手が参加しました。東京ＹＭＣＡからは東陽町と山手センターの2チーム32人が出場。東陽町センターは女子総合2位、男子総合3位、男女総合で3位に入賞しました。また、臼井遼君（小3）は、2年連続で最優秀選手に選ばれるなど、健闘しました。

出場したのは年長から中学生の子どもたちですが、夏休み中に週3日、1日に2500から4000メートル泳ぐという特訓を乗り越えて、頑張りました。

（東陽町ウエルネスセンター　小林和弘）

すべての人を一つにしてください

共に泣き、共に笑う「地球市民」

「世界中のこどもたちが、いちどに笑ったら、空も笑うだろう、ララララ海も笑うだろう、世界中のこどもたちが、いちどに泣いたら、空も泣くだろう、ララララ海も泣くだろう、ひろげようぼくらの夢を、とどけようぼくらの花を、世界に虹をかけよう、世界中のこどもたちが、いちどに歌ったら、空も歌うだろう、ララララ海も歌うだろう」（新沢としひこ「世界中のこどもたちが」より）

日本ＹＭＣＡ同盟で「地球市民育成プロジェクト」が継続しています。今年は海外からの25人を含め総勢１００人での開催です。２００９年より４００人の地球市民を国内外に排出してきました。英語では「グローバル・シチズンシップ・プロジェクト」といいますが、「グローバル人材」とは訳さず「地球市民」です。1週間の東山荘（御殿場）での研修を含めて1年間のカリキュラムが組まれています。

世界では１１９の国と地域にＹＭＣＡがあります。ＹＭＣＡが育てようとしているのは、英語が流暢に話せ、世界に出て行きビジネスで勝ち抜くグローバル人材ではありません。みんなで笑い、泣き、歌う「地球市民」なのです。オリンピックでメダルを集めるのではなく、またウランを堀り、廃棄物を捨てる関係でもありません。安い労働力を得るためでもない、もちろん、国内では疑問視されている原発を輸出するのではない、国際関係を築くための市民がいま必要とされているのです。夢を広げ、声をとどけ、花を咲かせ、世界に虹をかけるためのこどもたち・青年たちの輪を広げていきたいのです。

この夏、米国リッチモンドから7名の青年が石巻を訪れました。彼らが次の世界を作っていくのです。東北・福島の復興はまだまだ途上です。

（総主事　廣田光司）